

P1-038 私たちの学校林の成り立ち ～伊那西小の森若 返りプロジェクトI～

○千賀義博¹・横山千佳¹・唐木心優¹・清水 開¹・中西唯稀¹・
松村竜誠¹・ワイズナーディラン武蔵¹・榎本浩実²・黒河内寛之³

¹ 伊那西小学校・² 株式会社やまとわ・³ 東京大学大学院農学生命
科学研究科

長野県伊那市にある、今年で開校70年を迎える伊那西小学校は、校舎を取り囲むように1.4haの「林間」と呼ばれる学校林を所有し、この林間を活用した教育活動に取り組んでいる。1950年の開校当時は、草原だった場所に、翌1952年に背丈より低いカラマツ500本をPTAの手で植樹した。現在は、これらカラマツは優に20mを越える高さに成長している。林間には、他にも、アカマツ、さくら、モミジ等が自然に生えたり、あるいは、卒業記念に植えられたりと、42種類600本以上の樹木が生育している。樹木の多くは、背丈が随分と大きくなり、子どもたちが、全身で触れたり、観察をしたりするには適しているとは言えない状況があり、“子どもたちの目の高さで利活用できる森”は、学校の願いとなっていた。そこで、この森を今後24年かけて、計画的に大規模伐採し、子どもたちの学びの森となるよう、平成31年4月から運用してきている。本研究は、①過去70年の森の成り立ち ②大規模伐採の計画と実施 ③4月からの林の成長を観察することにより、子どもたち及び職員が今後どのような林間をどのように残していくかを見出そうとした研究である。